

等たくさんあり、説明によるアイヌ人の生活様式、小屋の建て方等、興味をもつて聞いた。その老人の説明の仕方といい、皆を笑わせる方法といい、観光客に対する話し方は、なかなか堂に入ったもので楽しかったが、「観光バスが多く来て金を置いて行ってくれることを祈る。」なんて、冗談であろうけど、言われた時には悲しく思ったりした。現在、アイヌ人の数は非常に少なくなっていると聞く。それ故に、人種の違うという事を一般の人々に公開して生活する。それも一つの商売であるかもしれないけど、もつと地味に、アイヌの生活を残しておいてほしいと思つた。それは、私達の為ではなく、彼らの為に。だが世の人々は、珍らしく数少ないものに興味を示すし（私達もそうであるからこそ、ここへ来たのだが）それを、あてにして商売するのも世の常である。しかし、アイヌの場合、観光化されることによつて、その純粋性というものが失なわれてしまうのではないか、と思う。かと言つて、アイヌの人々の、いわゆる純粋と言われる生活は、実際には不便であるし、又、世間の差別ということもあるので、私達と同じ生活に移つてしまつて、なお且つ純粋なものを残すという事は、むずかしいであろう。只、観光用としての部落が出来、アイヌの生活様式を見せる、ということになつてしまう。こうなるのは必然的であるかもしれないけど、種族が亡びてしまうことに、又、あまりに観光的になりすぎているアイヌに、一種のわびしさを感じないではいられなかつた。

楽しい一時であつたが、この様な考えがチラチラと頭に浮かんで来て、少々沈んだ気持ちにもなつたが、登別へ向うバスの中の、歌を歌つたり、おしゃべりしながらの旅に、いつしか楽しさを追うだけの観光客となつて、今日の目的地、登別では、楽しい夜を過ごしたし、又、ぐつすりねむることも出来た。



登別 → 洞爺湖

10班 短食2の3,4
(谷口, 岡田, 中田, 出原)
(谷, 田北, 高木, 武田)

7月25日(第11日目)

この日は登別の日活ホテルを出発して昭和新山へと向かう。昭和新山とは個人の所有物

とか……新山を、洞爺湖のロープウェイで有珠岳まで登り、山の頂上、あるいはその囲りの荒々しい山肌から白煙が吐きつづけているのを見物。有珠岳から洞爺湖を展望するのも又格別に美しかった。おもわず Oh, beautiful! と口に出る。(学のある人は違
うネ!)

さて次は、ホテルコタンで待ちに待った昼食。カレーライス。おいしいと感じたのは、空腹の為か…? 少し休み、後、湖上遊覧、大体、湖の中央にある中島まで往復80分。この中島には、森林博物館があり興味深い所だった。博物館の前の芝生の緑のあさやかなこと、白い建物と非常に調和して囲りの木々をいつそう美しくしているようだった。

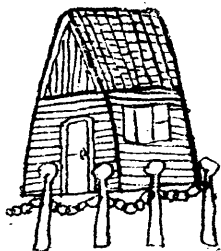
夜は自由解散があり、皆んなお土産を買いに町まで出かける。お土産を買う有様は、女性ばかりのせいか恥かしさなど眼中になく(?)4・5人ぐらいつつ、かたまつて値切ること、値切ること……大人顔まけ……ふだんおとなしそうな人でもいざとなればはりきつてしま
い……

長い北海道旅行の中でも、この事は忘れがたい事の一つです。余り頑張りすぎたせいか、空腹になり、皆意見一致で(やはり女性だなあと痛感)ラーメン屋に飛び込み、いや飛びこんだのではなく、京女性らしく、おとなしく、おしとやかに、のれんをくぐり……空腹を満たす。(但し、この時のラーメンのまずかったことこの上なし。念のため値段80円)

長い旅行もこの日を最後に、明日から、お船とお汽車に乗って、なつかしい我が故郷に帰るのだが。考えてみれば長いようで短い旅行だった、と思う。楽しい旅もより親しくなつた友とも離れ離れになり、又、交通公社のお兄様、写真屋さん、岡部先生、そして他の諸先生方とお別れしなければ、と思うと……やはり、北海道最後の夜ともなれば、いくらジャジャ馬でもちよつぱり感傷的にナルモノデス。

洞爺湖 → 京都

(北海道よさようなら…)



11班 短食2の4
(西郡、長谷川、苗村、仲井
寺見、立花、脇本、和田、中野)

7月26日(第12日目)

目がさめて今日は7月26日。「あーあ。」思わず溜息が出る。北海道とも今日限りか